

第4章

高岡短期大学の 発展と進化

平成12年4月、産業工芸学科、産業情報学科の2学科体制から、産業造形学科、産業デザイン学科、地域ビジネス学科の3学科に改組され、すでに3専攻になっていた専攻科との一貫教育が可能な体制が整えられた。短大2年、専攻科2年の教育から新しい人材が輩出することを確認した。

平成15年6月19日、蠟山昌一第3代学長が逝去された。この日、高岡では御印祭が行われており学生が多数参加して金屋町は活気にあふれていた。蠟山学長の死去は、私たちにとって大きな悲しみをともなった。校内には暗く重い空気が漂い、空白の時間が流れた。私たちは、蠟山学長が病を押して卒業式で祝辞を述べられ学生一人ひとりと握手されたことや、入学式では体力の消耗も顧みず新入生へ歓迎の言葉を述べられた姿を忘れることができない。

また、県内3大学による再編統合の困難な時期に、大学人はこのように考え、このように行動するものだということを直に教えていただいたと考えている。私たちは、蠟山学長によって大きく成長したと自負している。

入学式お祝いの言葉

—平成15年度入学式学長式辞より再録—

第3代学長 (故) 蠟山昌一



皆さん、高岡短期大学への入学おめでとう。私は教職員を代表して、さらには、皆さん方の先輩に代わって、皆さんの入学を心から歓迎し、お祝いしたいと思います。

皆さんはとうに御存知でしょうが、この高岡短期大学は国立の短期大学の第1号として、1983年(昭和58年)10月に誕生しました。人間で言えば、今年で満20才。やっと成人になる若い組織です。私が言うと笑われるかもしれませんが、若いということは素晴らしいことです。皆さんは若さを存分に発揮し、若さの素晴らしさを実証してほしい、と思います。もちろん、若さを理由に何をして良いということではありません。振り返って見て、自分が行ったことを恥ずかしいと思うようではいけません。後から誇りを持って振り返れる行動をとらなければならないのです。



54名の産業造形学科、26名の産業デザイン学科、128名の地域ビジネス学科、そして35名の専攻科の皆さん、皆さんの所属する学科は異なりますし、専攻も様々です。しかし、皆さんは共にこの高岡短期大学の第18期生として、また、専攻科の第16期生として、このキャンパスで過ごし、学ぶのです。仲間として、ぜひ仲良く助け合い、お互いに協力して、これからの2年間を過ごし、卒業した後で、自分の学生生活を自慢できる、誇りに思えるようにしていただきたいと思います。

私は5年前の4月、皆さんと同じように高岡短期大学に加わりました。そして、あと1年で学長としての任期が満了となります。皆さんよりも1年早く、私は高短を卒業することとなります。では「この5年を誇りをもって振り返れるか。学長、教えてください。」恐らくここに居られる多くの方々が少なくとも内心はそう思っておることでしょう。「その通り。」私の答えはYESです。

私がそう思っていることを証明するのは難しいことですが、傍証はいくつかあります。そのうちのひとつをお話ししましょう。

実を申しますと、私は昨秋以来、病人です。厚生労働省が認定する特定疾患のひとつである特発性肺線維症という病気にかかっていることがわかりました。原因不明の難病です。私は苦しみました。今なお、苦しんでいます。肉体的には、ご覧の通り、私は息絶え絶えです。酸素のお世話になりっぱなしです。私は、これまで身体のことなぞ心配したことがなかった。身体が頑健なことに比較優位が、競争力があると思っていました。その私が、10月、「入院して検査の上、適切な処置があれば、それを施しましょう。」と言われてしまいました。その結果、2ヶ月半の病院暮らしと半病人の生活を余儀なくされ、現在に至っています。私の病気は直る見込みはありません。肉体的に苦しいだけでなく、気持ちも弱まりました。困りました。こういう事態に立ち至るとは全く予想もしていなかったからです。頭にきて女房に当たり散らしたことも、クヨクヨしたこともありました。しかし、よく考えてみれば、こうなった以上、出来ることは余り無いのです。選択範囲が狭いのです。ですから、出来ることのなかで一番やりたいこと、2番目にやりたいこと、という風にハッキリと順序付け、大切なことに集中してやっていくしかないのです。何を本当にやりたいのか、それを決めるには自分に自信がなければなりません。そして、自分の行った結果に誇りを持たねばなりません。そう考えると楽になりました。

今、私はうまく息が出来ず、皆さんの前で皆さんを歓迎する式辞を披露しております。休んでも良いのかもしれませんが、私は皆さんの前で高岡短期大学学長として6回目の、そして、定めにより最後の入学式辞を述べたい。それが今の私にとって一番大切なことだ、と考えて、ここに立っているのです。

皆さん、高岡短期大学へようこそ。

平成15年4月7日

高岡短期大学学長
蠟山昌一

回 想

「高岡短期大学の学長にならないかという話があるんだけど、君、どう思う?」「積極的には賛成しないけど、あなたがやってみたいのなら、もちろん私も一緒に行くわ。」こうして高岡と私たちの御縁が始まりました。



1999年

昌一は学生時代、山岳部に所属していましたが、その頃熱中していたスキーを高岡で復活させました。スキー初心者のうえ、冷え性で寒い場所が苦手だからと渋る私を、昌一は温泉や美味しい郷土料理で誘惑しながら、ゲレンデへ連れて行きました。短大の教職員の方々にもたびたびお付き合いいただきました。シーズンの締めくくりは、立山での山スキーでした。当日はいつにもまして早起きし、自分でサンドイッチやコーヒーを準備して出かけて行きました。ともすれば閉ざされがちな冬を、積極的に楽しむことを教えてくれました。

毎年6月頃になると、主に県下の高校に高岡短大のことを説明する高校訪問が行われました。我が家ではそれを「営業」と呼びました。「今年もそろそろ『営業』が始まるよ。」朝出かけるとき、「『営業』がんばってね。」そして帰ってきたときには、「今日の『営業』どうだった?」「手応えがあったよ。」「それはよかった。」などという会話がありました。朝から夕方まで一日に複数校を回ることは大変だったでしょうが、入学志願者倍率に『営業』成果が表れると大変喜んでいました。そして、昼食をとる店などに、いくつかお気に入りがあったようで、

蠟山洋子(蠟山昌一前学長御令閨)

ささやかな楽しみもちゃんと作っていたのだなと感心しました。

講演会や学園祭などの行事には、私もたびたび参加させていただきました。「こんなにいっぱい買わされちゃったよ!」と、学生さんたちから買った食券を手に、困ったふりをした昌一と学園祭へ行くことは楽しみでした。あちらこちらの模擬店から「学長、食べていってください。」「次は私たちの店に来てください。」と声をかけられた時のうれしそうな顔を思い出します。



数ある写真の中で、珍しく「ピース」のポーズをとっています。

「今年は君も卒業式へ来てほしい。」2003年の卒業式は私にとっては初めての、昌一にとっては最後のものとなりました。そのときの祝辞は卒業生の方々へのものだけではなく、自分自身への励まし、そして今となっては私への手紙のように思えます。

(前略)…「矜持」(自分を押さえ、つつしみつつ、自分を誇りに思うこと)の大切さは、私自身が病を得、今なお、苦しんでいるなかで学びました。…(中略)…人知れず頭にきたことも、クヨクヨしたことも、ありました。しかし、考えてみれば、こうなった以上、出来ることは余り無いのです。選択範囲が狭いのです。そう思うと楽になりました。出来ることのなかで、一番やりたいこと、2番目にやりたいこと、という風に順序付け、やっていくしかないのです。何がやりたいか、それを決めるには自分に自信がなければなりません。そして、自分の行っ

平成10年(1998)

主なできごと

(3.20)平成9年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を举行。(3.31)学長 宮本匡章が任期満了により退任。(4.1)第3代学長に蠟山昌一(大阪大学教授)が発令される。(4.8)平成10年度入学式を举行。

た結果に誇りが持てぬようでは、病に負けてしまいます。さらに、多くの方々の協力なしには、この病と共存できません。私はつつしみ深くならねばならないのです。ボロボロになった肺臓をいたわりつつ、十分でない呼吸力を可能な限り生かし、矜持をもって、私は私の新しい道を選択してゆきます。…(後略)

「洋子さん、トライ・アンド・エラー。またがんばればいいよ。」尻込みしてやらないより、やってみて、う

まくいかなかったら考える。一歩前進したら、またそこから新しい世界が広がるかもしれない。さまざまなことに積極的だった昌一の生き方は、これからも私のお手本です。

高岡短期大学の教職員・学生の皆様とすごした6年間の日々に感謝申し上げます。そして私たちの「ふるさと・高岡」で、その暖かい雰囲気が育まれ、いつまでも受け継がれていくことを願っています。

若干の裏話



第6代副学長 行田 博

私は、平成10年正月から13年3月まで、副学長として高岡短大にお世話になった。私には専門らしい専門はないので、何事をするにつけても、学長はじめ関係教職員の皆さんに大変お世話になった。今般の記念誌発刊の機会に、若干の裏話をご紹介しますこととしたい。

富山大学との単位互換協定

平成10年4月に蠟山新学長が就任され、その2～3ヵ月後富山大学の経済学部長が蠟山学長を表敬訪問された。お帰りの際、学長が学部長を副学長室に案内された。絶好の機会と思って、学長の前で僭越ではあったが、「そう遠くない時期に高岡短大と富山大学は統合する可能性が大きい。現在も非常勤講師などで教官の交流があるが、将来のことを念頭に、たとえば単位互換の実施など一層の協力関係強化をお願いしたい。」と申し上げた。これが富山大学幹部との最初の接触で、その後同大学との関係を強化し、平成12年11月に人文学部との間で、また翌月には経済学部との間で単位互換協定を締結するに至った。人文学部の場合は同学部の事務部に高岡短大事務部出身者がおり、学部内部で大いに協力してくれた。両協定とも13年4月から実施された。

学科改組

平成11年4月下旬ごろ、蠟山学長から、「1年間いろいろ検討した結果、学科2学科、専攻科3専攻という異

常な状況を改め、専攻科の専攻に合わせた学科構成に改めたい。阪大時代の経験から、文部省との学科改組交渉の難しさは良く分かっている。2年計画で実現したいので、そのつもりで文部省との関係をよろしく。」という話があった。私は、「この内容なら2年掛ける必要はないでしょう。今年やりましょう。」と応えた。学長は、いい加減なことをいうなど言わんばかりのびっくり顔であった。

正直なところ、私はこの程度のことであれば、文部省に1回話しに行けば決着すると考えていた。見通しを誤った。担当の専門教育課長が4月に交代したばかりで、高岡短大のことは何も知らないということの影響の大きさを見誤ったのである。5月中旬に文部省に行ったが、話の最中に課長は頻繁に課長補佐や係長の席のほうを見ていた。1回では決着がつかなかった。

5月末ごろ再び文部省に行った。私の対文部省交渉の基本姿勢は、可能な限り、ギブ・アンド・テイクの姿勢を貫くことである。具体的なことはいえないが、この時も、私なりに考える文部省にとってのメリットを強調して学科改組の承認を求めた。課長は「そんなことがメリットになりますかねえ。」と首をひねっていたが、絶対に専門教育課にとってメリットになると強調し、最後には学科改組の承認を得て退出した。翌日、高岡短大で蠟山学長に、「予算要求事項であるから、それなりに形を整

平成11年(1999)

主なできごと

(3.17)平成10年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙行。(4.5)平成11年度入学式を挙行。

えなければならないが、事柄としては認められた」旨報告すると、学長は哑然として、一瞬言葉が出ない様子であった。時間的制約もあり、文部省との折衝は事務的には大変であったが、12年度予算で認められ、学科改組が実現した。

専攻科修了生の学位申請要件の緩和

平成12年、専攻科は設置以来5年となり、大学評価・学位授与機構の再審査を受けることになった。その機会に初めてまじめに専攻科関係について勉強した。その結果、「大学での16単位以上の単位取得」が学位申請の要件とされていることの不自然さに思い至った。学位授与機構に対して制度の改正検討を求める書類を書いて、再審査の打ち合わせのために機構に行く職員に託した。2～3ヶ月たっても何の連絡もなかった。

毎年、昭和43年文部省入省組はお盆の頃同期会を開いていた。この年も8月半ばに開催され、幹事の1人は大学評価・学位授与機構の高石副機構長であった。高石さんに本件検討状況を質したところ、「機構内部でこれが問題になったことはなく、議論したことはない。」という。そこで、縷々説明し、機構の存廃を賭けて自分自身の問題として検討すべきではないかと問題提起した。彼は一言も挟むことなく聞いていて、最後にただ一言「おもしろい問題提起だ。」と言い、ニヤッと笑って引き取った。

主なポイントは2つ。①2年制の短大専攻科は、学位

授与を前提として文部省が設置を認めたものである。②大学での単位取得を要求するのは、機構が「短大の教育は十分には信用できないので担保が必要」と考えているからであろう。しかし一方では、機構自身が学生の試験・審査を実施しており、すでに多数年にわたる経験を有している。しかもなお、大学の単位取得を要求し続けることは、機構自身に十分な審査能力がないと公言するに等しい。この状態が続くなら学位授与は一般の大学にまかせ、機構は廃止すべしという議論も起きるのではないか。

11月半ば、高石さんから電話が入った。「例の件は決着し、大学の単位取得を必要要件とはしないことになった。ただし、規則改正は官報に搭載する必要がある、官報搭載は手続き上1月になる見込み。」高石さんに問題提起してからわずかに3ヶ月。この間に、問題意識のなかった機構内をまとめ、文部省を説得し、答申取りまとめ作業中であった大学審議会の答申に制度改正の必要性を謳った1文を入れさせてしまった。鬼神ともいべきか。この制度改正は、高石副機構長の存在があって初めて実現したものである。

翌平成13年4月、私は国立明石工業高等専門学校長に転出した。明石高専には高岡短大と同じステータスの専攻科があり、この制度改正によって弾力的な対応ができるようになったと教官の話題になっていることを知り、素直に喜んだものである。

蠟山学長の導いた3大学再編統合、そして西頭学長の下の国立大学法人化

理事・副学長 水島和夫



1. はじめに

平成13年4月赴任した高岡短期大学は、新入生合宿研修で立山へ出向くことから始まり、大学に回ってくる二上神社の祭の獅子舞を蠟山学長とともに迎えたり、友誼会で教員たちと和倉温泉に行き痛飲したりと、今思えばきわめて牧歌的なものであった。しかし国立大学の構造

改革の波が押し寄せてからは、大学創設の頃と同様と思うが、たいへん厳しい激動の4年間であった。高岡短期大学が20余年の歴史を閉じる今、4年を超えて歴代最長の在任となる最後の副学長として、この4年間の大学再編統合と法人化への対応を、学内外がどのような状況の中、どのような手順を踏みながら進めてきたかを、記録に留める。

平成12年(2000)

主なできごと

(3.17)平成11年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙行。(4.1)学科が、従前の2学科(産業工芸学科、産業情報学科)から、3学科(産業造形学科、産業デザイン学科、地域ビジネス学科)に再編改組。(4.5)平成12年度入学式を挙行。

2. 激動の始まり

それは6月14日突然やってきた。蠟山学長が東京での国立大学長会議へ出席したところ、遠山文部科学大臣から国立大学の構造改革の方針『遠山プラン』が示されたのだ。国立大学の再編統合や法人化を含む内容は、多くの大学関係者に衝撃を与え、富山大学(以下、「富大」という。)では、たまたま時を合わせて入試ミス問題が公になり、一層の波紋が広がった。

高岡短大内では、『遠山プラン』を伝えたTVニュースの中で「短大の他大学との統合」が入っていたと大騒ぎになり、文科省に確認したところ、「単科大(医科大など)についての他大学との統合等」の読み間違えということで、一応収まった。

しかし、後に、蠟山学長は、国立大学長会からの帰りの車中同席した富山医科薬科大学(以下「医薬大」という。)高久学長と、大学の将来を考えて統合の方向を真剣に検討する必要性について意見を交わしたと言う。さっそく7月12日の学内運営会議と教授会で、学長は、「高岡短期大学の将来をどう描くか」と題した資料を示して意見交換を行い、同18日には、来学した富大小澤学長に3学長の意見交換会を提案した。賛同を得、意見交換会は夏休み中の8月、本学で行われ、9月初めには、この経過について、3学長から文科省や中沖県知事に報告された。県のこの問題に関する関心も高く、11月には県内各界の有識者を集めて「国立大学の改革等に関する懇談会」(以下、「県有識者懇談会」という。)を発足させ、中間提言「国立大学の改革再編について(平成13年11月26日)」を3大学と文科省に示した。

本学では、9月6日、教職員集会で学長から説明があり、ついで同13日の教授会で、①伝統工芸の継承、よき社会人の育成等本学の果たしてきた使命の継続、②高岡での高等教育機関存続・拡大、③短期高等教育機関としての実績・ニーズに基づく準学士制度の活用、の3原則の下、再編統合の協議に入ることが了承され、「再編統合のためのプロジェクトチーム」編成の運びとなった。

3. 3大学統合協議

この秋から始まり、蠟山学長が全身全霊を傾けて取り組んだ3大学統合協議は、平坦ではなく、長く、また多くの曲折を経た、まさに命を懸けてのものとなってし

まった。

3大学の間では、基本的に、人文社会系では富大と本学、自然科学系では富大と医薬大との間で意見交換を進めていくこととなっていたが、富大では、6月以来もめていた入試ミス問題に関連して小澤学長が退任することとなり、10月の学長選で瀧澤学長が選ばれ、11月初めに新しい執行部体制が発足した。

意見交換会で本学から提案していた学部の大膽な再編を含む蠟山学長の統合構想、「富山総合大学(仮称)の創設をめざして」に対して、新執行部から、「学部の再編にはふみこまない(いわば『ホッチキス型』)統合」の提案があった。中身のある統合を目指す蠟山学長が反論の書簡を出し、これに対し富大側からも書簡が来るという、富大新屋事務局長が「紙つぶての応酬」と呼んだやりとりが続き、両大学噛み合わないまま年を越してしまった。

平成14年の新年早々、2大学間の意見交換に加え、3大学による「県内国立大学の再編・統合に係る懇談会」が始まったが、医薬大側から、統合協議に入る前提としての「基本的確認事項」が提案され、新大学運営の基本的あり方など重要な内容に関わる確認事項をめぐっての調整は難航し、6回の会合を数えた後ようやく、3月16日、「再編・統合への協議開始についての合意書及び基本的確認事項」の調印式が行われた。

この間、県有識者懇談会は、その小委員会に3大学を招き、「各キャンパスを残し県民にとって魅力ある大学を」や、「本学を含む再編統合で特色ある大学に」などの要望を寄せ、教員養成機能についての関心にも大きなものがあつた。また、富大との間でも、再編統合構想全体の中での本学と教育学部との関係が焦点になっていた。

4月8日、3大学の懇談会で合意に基づく統合協議の進め方についての話し合いが行われ、正式の協議機関として各大学の執行部や学部長を集めた「新大学構想協議会」を発足させることとなった。本学では、同11日、教授会及び全学教職員集会を開いて状況の報告等を行った。

新大学構想協議会は4月22日の第1回から毎月2回程度開催され、9月の第7回からは、各大学の運営諮問会議委員と県関係者がオブザーバー参加することとなった。これらの協議会のほか夏休み時期には、3大学学長・副学長による非公式な話し合いや、富大教育学部との懇談

平成13年(2001)

主なできごと

(3.16)平成12年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙行。(4.1)保健管理センターの設置。(4.5)平成13年度入学式を挙行。(8.16)高岡短期大学において、「第1回富山国立3大学長意見交換会(非公式)」を開催。(8.24)富山医科薬科大学において、「第2回富山国立3大学長意見交換会」を開催。(9.13)教授会において、3大学が協議に入ることを承認。(10.2)富山大学において、「第3回富山国立3大学長、副学長、事務局長意見交換会」を開催。

も行われた。また、8月30日には富大黒田講堂に3大学の教職員数百人を集めて3学長による「再編統合に関する説明会」が開催され、本学からは教職員の2/3が出席した。新大学像等について理路整然と説明する蠟山学長の口調は際立っていた。一方、協議の中で争点の一つとなっていた新大学の教養教育のあり方を検討する教養教育WGが8月から本学を会場として始まったが、3大学の溝は容易には埋まらなかった。

4. 蠟山学長の入院と統合協議の行方

10月16日蠟山学長が突然入院した。病名は間質性肺炎、肺の機能が大きく損なわれていく難病で、高岡短大のあらゆる面で先頭に立って大学を牽引してきた学長の思いがけない入院に全学は大きな衝撃を受けた。学長によれば病気の兆候は春過ぎ頃からあったようだが、上述の統合関係の用務に加え、5月からの富山・石川の50校を越える高校訪問、2回のオープンキャンパス、2ヶ月を要した教員の処分問題などが続き、また、国立大学の法人化が固まりその準備作業が始まって10月初めには学内に正式な法人化準備委員会を発足させていた。このような忙しさに加えて、蠟山学長は、金融庁関係の「日本型金融システムの行政と将来ビジョン懇話会」座長、金融審議会金融分科会長として8、9月は毎週のように上京していた。際立った体力と気力の持主であった蠟山学長にしかできぬ超人的な仕事ぶりであったが、これらの激務が病状に影響したのではないかと思う。

当初1ヶ月を予定していた入院は延び、退院したのは年末になってしまった。この間学長は以前と変わらぬ気力と頭脳で、頻繁に病床を訪れる我々学内関係者に、学長を欠いて行う新大学構想協議会への対応等種々細やかな指導をいただいた。また、高岡まで足を運んでいただいた瀧澤、高久の両学長と病床での3学長協議も行われた。統合問題に大きな関心を寄せている地元からの要望で、高岡市役所に佐藤市長をはじめ市、市議会、商工会議所などの関係者数十人を集めて11月22日行われた説明会や12月19日の全学教職員集会に蠟山学長は病床から酸素ボンベ持参で出席して説明した。11月7日学内で突然倒れ、日ならずして帰らぬ人となって学内に第2の大き

な衝撃を与えた横山幸文教授の井波瑞泉寺での通夜にも学長は病床から出席された。

平成15年の新年賀詞交換会、復帰して挨拶に立った蠟山学長の姿に教職員一同安堵の胸をなでおろした。しかし、統合協議の方は、デッドロックにのりあげた状態にあった。教養教育WGは11月の第5回を限りに破綻していた。新大学構想協議会から学長、副学長等に人数を絞って11月下旬から動き出した新大学構想策定委員会も、暮れの御用納めの日を含め毎週協議を重ねたが進展はなかった。1月7日の第7回構想策定委員会から学長は酸素ボンベの入ったナップサックを背負って出席した。協議を前進させるため、学長は、新大学における人文社会系学部的大幅な再編や、準学士制の活用という本学の主張について、あきらめたわけではないがすぐに実施は求めないという譲歩を決断した。また、医薬大も「基本的確認事項」実現に関しての微妙な問題点について強くは言わなくなっていたが、主要な問題は、対立が埋まらない教養教育のあり方と、本学と教育学部とでどのように再編して新学部(芸術文化系学部)を作るかであった。この問題を解決するために教育学部と本学、さらに医薬大からも加わって芸術文化学部WGを設け、2月まで4回の協議を持ったが、特に新学部の中身として重要であると考えられた音楽分野をめぐる問題で容易に結論は出ず、本学としては、別の組合せも視野に入れた選択肢も考えざるを得ないような状況であった。

事態が急に進展しだしたのは3月下旬からであった。3月に4回開かれた構想策定委員会のほか非公式の3学長による協議も行われた中で、教育学部の美術系教員と富大から提供される定員をもとに現高短と同規模の芸術文化系学部を作る方向が浮かび上がり、構想を詰めるための「芸術文化学部(仮称)タスクフォース」が、3学長と、本学教員4名、教育学部から学部長と美術教員3名により設けられた。また、教養教育については、当面基本的には各キャンパスで行うという妥協に至った。こうして第15回目となった4月22日の構想策定委員会で話し合いがまとまり、連休明けに再編統合合意の調印式が行われることになった。

そして翌23日から蠟山学長は休みをとり、28日から再

平成14年(2002)

主なできごと

(1.8)富山医科薬科大学において、富山県内国立大学の再編・統合に係る懇談会を開催。(3.20)平成13年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙行。(3.26)富山医科薬科大学において、再編・統合への協議開始についての合意書及び基本的確認事項に調印。(4.5)平成14年度入学式を挙行。(4.22)高岡短期大学において、第1回新大学構想協議会を開催。(8.30)富山大学において、3大学の教職員に対し、再編・統合に関する説明会を、3大学長がパネルディスカッション形式で開催。(10.1)平成14年度第1回法人化準備委員会を開催。(11.11)富山大学において、第9回新大学構想協議会を開催し、学部編成等について協議を行い、今後、構想策定委員会を開催し、学部、大学院、教養教育、管理運営について協議していくことになった。(11.20)富山医科薬科大学において、第1回構想策定委員会を開催。(12.19)第1回教職員集会を開催し、3大学統合に関し、経緯と今後の方向性について学長から説明。



入院となった。1月以来学長は常に小型酸素ボンベの入ったナップサックを背負い、数メートル歩くにも息が切れるという状態であった。学長官舎は3階にあり、帰宅で公用車を降りてから階段を上るのは、「毎日チョモランマ(エヴェレスト)へ登っているようなものだよ。」と言われた学長の言葉を忘れることはできない。このような中で蠟山学長は本学の将来を決した上述の統合協議(1月以降、構想策定委員会、芸術文化学部WGその他学長が加わった話合は17回に及んでいる。)に主役を勤め、県有識者懇談会や教職員集会で報告するとともに、北陸国立大学長懇談会、教授会、運営諮問会議等の学務もこなした。3月20日の卒業式には本学を巣立つ全員に卒業・修了証書を手渡し、『矜持』について話した式辞は出席者すべての心に残るものであった。入学式は、車椅子で壇上に上がって勤めた。

5月1日朝、古屋事務部長、深津課長と共に主治医に面談し伺った病状は厳しいものであり、前回入院時のように病室で相談したり指示を仰いだりできるようなものではなかった。7日に予定されている統合調印式になんとしても出たいと言う学長の希望に、医師は付き添って行くから可能だと言ってくれたが、結局叶わなかった。

調印式の翌日、統合合意について、学長に代わって全学集会で教職員・学生に報告し、翌9日には2学長と共に上京して文部科学省に報告、さらに12日には、県有識者懇談会小委員会に報告した。学内では、特に、統合後に設置する芸術文化学部について教員懇談会で構想案を説明するとともに、新学部構築の準備作業を全学挙げて



取り組む体制として、3学科長、タスクフォースメンバー、関係教員による『芸術文化学部(仮称)設置準備委員会』を設置し、第1回を6月13日に行った。

5. 蠟山学長の逝去と大学の難局

蠟山学長の容態は日々深刻なものとなり、5月半ばからは肺炎を併発、集中治療室に入り面会もできない状況であった。そして、6月19日、金屋町の御印祭の夕、とうとう帰らぬ人となってしまった。多くの教職員もそうであったと思うが、学長、そして数ヶ月前には横山教授を失っての心の痛手は例え様もないものであった。23日、柳沢前金融担当大臣、中沖知事など県内外から駆けつけた人々を含む500人が参列した葬儀が終わり、大学正門前を通る霊柩車をお見送りしていた佐藤孝紀教授が路上で突然倒れた(幸い大事には至らなかった。)のを見た時には、まさに胸がつぶれる気がした。

しかし、心の痛手で茫然としているわけにはゆかない。学長事務取扱となり、新たな学長が着任した11月まで数ヶ月の繁忙と重圧は私にとって実に厳しいものであった。厳しさの中で何とか勤めをまっとうできたのは、今振り返れば、教職員の、大学の最大の難局に立ち向かう団結と協力があったからだと思う。

この時点で高岡短大が直面する主要な課題は次のようなものであった。①蠟山学長の大学葬、②新たな学長候補者の確保、③新大学創設準備のための大学間協議、④芸術文化学部の構想固めとその要員の確保、⑤国立大学法人化への準備作業、さらに、⑥この年から始まった文

平成15年(2003)

主なできごと

(1.23)富山大学において、第1回芸術文化学部WGを開催。(3.5)米国ウエスタンオレゴン大学との友好協力関係に関する協定書を締結。(3.20)平成14年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙行。(4.7)平成15年度入学式を挙行。(4.8)高岡短期大学において、第1回芸術文化学部(仮称)タスクフォースを開催。(5.2)臨時教授会で3大学の再編・統合に合意することを機関決定した。(5.7)名鉄トヤマホテルにおいて、第10回新大学構想協議会を開催し、3大学が再編・統合に合意することを了承し、併せて調印式を行った。(5.30)富山大学において、第1回新大学創設準備にかかる懇談会を開催し、今後のスケジュール等について協議。(6.13)新学部の設置に向け、高岡短期大学内に芸術文化学部設置準備委員会(仮称)を設置し第1回目を開催。(6.19)蠟山昌一学長の逝去に伴い、水島和夫副学長が学長事務取扱となる(～H15.10.31)。(7.1)富山大学内に創設準備事務室を設置。(7.8)富山大学において、第1回新大学創設準備協議会を開催。(8.20)第1回英語海外研修をウエスタンオレゴン大学で実施(～9.14)(この後、毎年度実施)。(10.21)富山医科薬科大学において、第1回創設準備推進委員会を開催。(11.1)第4代学長に西頭徳三(愛媛大学副学長)が発令される。

部科学省「特色ある教育支援プログラム」への応募作業もあった。

①については、学葬委員会を設け、式の進行・内容、案内状送付先の検討等の準備作業を連夜のように行った。7月24日、本学で行われた大学葬では、文部科学省から工藤文部科学審議官以下3人、知事、市長以下県・高岡市関係者、産業界関係者、県内外の多数の大学関係者、教職員OBなどで講堂が埋まり、会場に入りきれなかった参列者のためにエントランスホールに中継ディスプレイも用意した。③については、調印式以降3大学執行部による懇談会を3回行った後、「新大学創設準備協議会」を設ける体制がまとまり、7月8日、第1回が開かれるとともに、その下に各大学から人を出しあって準備事務を行う新大学創設準備事務局や新大学の管理運営、事務組織、機構センターのあり方等を協議する多数の部会が設けられ、それぞれ検討作業が始まった。他大学に比べマンパワーの乏しい本学は、委員の選出が容易ではなく、多くの教員に負担をかけることとなっている。④については、新学部には設ける五つのコースの内容等を話し合うWGを設け各WGでの検討が始まった。また7月末から8月にかけて3回の設置準備委員会を開くとともに、8月12日には教職員に芸術文化学部の骨子案について説明する懇談会を開いた。さらに10月からは、新学部は学外から新たに迎える教授陣を募るための作業等が始まり、毎週会合を開かねばならぬ状況となった。⑤については、国立大学法人法が10月から施行となり、いよいよ新法人の中期目標・中期計画を作成する作業が始まって、この10月、2回の法人化準備委員会を開いた。⑥のいわゆる「教育COE」（翌年からは「特色GP」の通称となった。）については、蠟山学長葬儀の翌24日から関係教員等による検討委員会を設けて何回も検討を重ね、取組名称「融合と地域連携に基づく実践基礎教育の展開」で8月1日応募書類を提出した。1次関門を突破して同25日の東京でのヒヤリングまで進んだが、残念ながら採択には至らなかった。

さて、一番の難問は②の学長候補者探しであった。学科長、学長補佐等による学長候補者選考委員会を設けて7月初めから検討作業を始めた。学外から適任者をさがすこととし、委員会の検討で浮かぶ複数の候補者について、私と委員1名が出向いて本学の状況を説明して可能

性をあたっていった。近隣県や東京、大阪など何回も足を運んだが、どの大学も抱える国立大学法人化への対応問題に加えて、本学は再編統合への対応と4年制学部の新たな立上げという課題を持ち、学長任期も統合までのわずか2年間という条件もあって、いずれの候補者からも積極的な返事はいただけなかった。9月に入っても候補者が決まらず困りぬいていた時、愛媛大学に教養教育の改善等に手腕を発揮された副学長がおられる、しかも富山県出身、という情報を得た。さっそく松山に飛び、お会いして本学の状況を説明の上お願いしたところ御快諾をいただくことができた。現学長の西頭先生である。9月25日の学長選挙、臨時教授会で学内手続きを済ませ、翌日委員会メンバー達と酌み交わした酒は実にうまかった。11月5日の西頭学長着任式までは千秋の思いであった。

6. 西頭学長の下での統合準備と国立大学法人化

新学長の下、学外から募る教官の選考など新学部設置に向けた準備作業や、国立大学法人化へ向けての準備作業が加速し、平成16年を迎えた。

前年秋以降統合再編準備への3大学間の協議は各部会レベルの話合いが頻繁に行われており、学長・副学長等による協議は少なくなっていた。暮れ近くになって、実は医薬大高久学長が入院しているということを聞いた。しかも病名は、なんと「間質性肺炎」との由。さっそく医薬大病院にお見舞いに何うと、重症ではなく近く退院できるとのお話で、思ったよりお元気であった。一時的に退院されたが、3月まで入院は続き、病気が病気だけにたいへん心配したが、卒業式も無事勤められ、3月末の学長任期満了とともに退官されて、現在は快癒しお元気であるとのことである。

3月26日、第2回新大学創設準備協議会が行われ、4月からの国立大学法人化に伴う各大学の執行部体制の改変、特に医薬大については高久学長から交代する小野新学長の新体制に基づく統合協議メンバーの変更について検討され、新たな構成員による新大学創設準備協議会が4月9日開催された。本学でも滝沢理事及び古屋事務部長から代わった棚山新部長が委員に加わった。

以後、新大学創設の準備作業は、協議会からメンバーをしぼった新大学創設準備推進委員会や、管理・運営、入試、教養教育など各種の部会で具体的な検討が精力的

平成16年(2004)

主なできごと

(3.19)平成15年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙る。(4.1)国立大学法人法の施行によって、国立大学法人高岡短期大学となる。(4.5)平成16年度入学式を挙る。(6.30)文部科学省へ富山大学芸術文化学部設置計画書を提出。(11.10)衆議院調査局文部科学調査室による実情調査が富山大学で実施される。(11.30)大学設置・学校法人審議会における審議で新大学の設置を可とする回答を得る。

に行われている。新大学の名称は検討の結果、6月、「富山大学」と決定された。また、本学の位置する二上地区の名称も、「高岡(芸術文化系)キャンパス」に決まった。本学の「大学開放センター」は、機構・センター部会で議論の末、新大学地域連携推進機構の「地域づくり・文化支援センター」となることに落ち着いた。

4月からの国立大学法人化へ向けての準備は、法人諸規則の制定、特に新たな枠組みとなる会計関係や、就業規則・労使協定を含む人事関係での膨大な起草作業、学外者が加わる法人役員、経営協議会や教育研究評議会委員等の人選、安全衛生管理体制の整備などに関し繁多を極める事務作業、毎週のように開く法人化準備委員会、そして2回の全学教職員への説明会を要した。

いよいよ国立大学法人高岡短期大学が発足した4月1日は、新役員等への辞令交付、法人諸規則の制定等の重要事項を諮る第1回の役員会と教育研究評議会を開き、翌日は、午前中の入学式リハーサルの後、第1回経営協議会、そして第1回学長選考会議という慌ただしさであった。

一方、以上のような新大学への準備や法人化への対応作業と並行して、今度こそは教育COE(特色GP)を獲得しようと、年明け早々から対策委員会を始動させて検討を進めた。西頭学長の指導を得ながら構想・内容・特色に知恵をしばった「学生作品で学内を埋め尽くそうプロジェクト」の取組を4月上旬取りまとめて応募し、7月のヒヤリングも突破して採択に至った。さらに、この年から始まった現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)にも、西頭学長が命名した『「炉端談義」方式による地場産業活性化授業』の取組により地域活性化へ貢献を深めようと関係教員による委員会で検討を重ねて、7月応募し、これも10月初め採択が決まって、2重の栄冠と貴重な外部資金を勝ち取ることができた。

7. 芸術文化学部への設置に向けて

一年半の短期間であるが、国立大学法人となった高岡

短期大学の最大の課題は、待ったなしで迫った芸術文化学部の設置準備作業である。特に、新たな学部を大学設置審議会へ申請するための作業、すなわち、申請書類作成のための芸術文化学部の教育方針、内容等の詰め、また新学部が所属することとなる教員の教育・研究業績等の審査書類の作成を進める必要があった。新学部が平成18年4月からの新入生受入れを目指すには6月中に申請を行わなければならない、遅れは許されないものであり、また、新学部の授業を担当する教員に審査で不可が出れば学部の構想全体に影響が及ぶことになる。

申請は予定通り6月30日新大学創設準備事務局を通じて文部科学省に提出された。申請書類は、芸術文化学部の内容等については、芸術文化学部タスクフォースメンバー、設置準備委員会による検討作業および、同委員会に設けたカリキュラム、入試等各種検討部会及び新学部に関わる各コースのWGにより重ねられた検討を経て作成し、また、新学部担当教員の審査資料については各教員に依頼した研究業績等について取りまとめて事務的な整理を行った。この間、4月と5月には、全教員に芸術文化学部についての理解を得るための説明会を実施し、さらに、7月23日には全学集会を開いて、主として学生に対し新学部の内容を説明した。また、新学部について地域の十分な理解を得るために、8月9日、高岡市役所において、市、市議会、商工会議所関係者等に対する説明会を行った。

9月初旬文部科学省より大学設置審議会審査の途中経過についての連絡があり、申請資料に若干の補正を加えて再提出した。11月30日、審査結果について待ちかねた連絡があった。結果は、無事審査を通り、芸術文化学部は予定通り17年10月発足の運びとなった。以後、新学部の広報や入試方法等について具体的検討を進め、翌年4月からの学生受入れを目指して学内一丸となって走り始めている。

高短での思い出

3大学の再編統合化がほぼ固まった頃、高岡短期大学が歩んできた22年間の足跡を編纂しようと本委員会が立ち上がったと記憶しております。私は平成13年10月から

前事務部長 古屋 勇



平成16年3月までの2年半の勤務した思い出ですが、様々な出来事がありました。

3大学の再編統合の合意、横山先生の突然の死、蠟山

学長先生の死去、国立大学の法人化の決定、西頭新学長の就任など大学を揺るがす出来事が次々に起こりました。

平成13年9月11日に前住地(国立民族学博物館)で異動の内示がありました。この日は、皆様もご存知の世界中を震撼させた米国同時多発テロ事件の起きた日です。今顧みると、高岡短期大学で起こることとなる出来事の前ぶれではなかったかと思っております。

当時、大学を取り巻く環境が非常に厳しい状況下でありました。平成13年春に文部科学省は「大学の構造改革の方針」を発表し、大学の再編統合を進めることを打ち出し、更に法人化への強風が吹いていた頃でありました。

私が赴任した頃から3大学の再編統合問題の動きが活発化しようとしていました。当時の蠟山学長は、再編統合に当たり3つの堅持すべき条件を掲げられた「富山総合大学(仮称)の創設をめざして」を策定されており、このペーパーを何度も読み返しました。年明けの1月に文部科学省の組織廃止・転換に係わるヒアリング(短大としては初めて)に向けて、この基本方針を踏まえた想定問答を作成し、蠟山先生に筆を入れていただいた記憶が残っております。おかげさまで初めてのヒアリングでしたが、無事終えることができました。

この年の春(平成14年3月26日)には、3大学の再編統合化に向けた協議の場が設置され、この下に協議会、策定委員会(大学の執行部で構成)などを設けて動き出しました。協議会は、月1回以上の頻度で開催され、又適宜学長による懇談会も開かれましたが、各大学の思惑が絡み議論が進展せず3大学による協議の難しさをしみじみと体験させて頂きました。しかし、晩秋の11月頃からは協議の遅れを取り戻すために、策定委員会が毎週のように開かれました。これら関係者のご努力の結果、再編統合化に向けた協議の場の設置から1年後の平成15年5月7日に、3大学は再編統合することに合意いたしました。

その後、新大学創設準備委員会の設置や統合担当の事務部署の立ち上げ、芸術文化学部(仮称)設置の準備委員会などが設けられました。高岡短期大学にとっては、新大学の新しい学部に移行することから、蠟山学長の学部構想を踏まえ、水島副学長や秦、野瀬両学長補佐を中心に具体的な詰め作業が行われ、時として衝突が起き学内対立を生むこともありました。私は、新学部構想を文部科学省へ上申手続きすることなく異動しましたので、設置の審査会を通過したとの知らせを受けたときは「ほっと」致しました。

もう一点は、やはり蠟山学長先生との出会いでした。「部長 おさきに」と帰宅の際には部長室をのぞき声をかけていただきました。学長の声で赤倉スキー場に出かけたことや氷見の民宿に連れて行っていただいたこと、

また、ダウン帽をかぶり高岡市内を自転車で走っておられたことなど、事務への心遣いや気さくな一面の状景が思い出されます。

反面、学長として強いリーダーシップを発揮してこられました。3大学の再編統合問題では、蠟山学長が終始舵取りの役を担ってこられましたし、学内においても意見の集約化・一本化に手腕を発揮されました。このような学長がある日「検査を兼ね1カ月程入院します。皆さんにはご迷惑をかけますがよろしく願いいたします。病名は間質性肺炎。」と言われました。それは平成14年10月16日の入院の10日程前でありました。投薬の効果がなかったのか、12月末まで病院生活を送られることとなり、新年から大学に出勤されましたが、酸素ボンベを携帯され、あの山男でスポーツマンの先生のお姿とはかけ離れていました。しかし、日々の業務指示や再編統合への取り組み姿勢は衰えることなくボンベを持って3大学の再編統合に関する協議の場にも出席され続けられました。

また、卒業式は、卒業生一人ひとりに学長から卒業証書を授与することが慣例となっており、これについても壇上で椅子に座りボンベを携え、卒業生全員に対して直接手渡されました。この卒業式において贈られた言葉「矜持」は忘れぬ言葉となっています。

その後、病状は進行し再入院され病床からのご指示をいただくことになりました。蠟山先生が口火を切り情熱を傾けられた再編統合は、5月7日合意に至りましたが、その合意書への署名は残念ながら病床で行わざるを得ませんでした。それから僅か12日後に帰らぬ人となりました(合掌)。正に命をなげうって取り組まれました再編統合問題でありました。新しい芸術文化学部が、高岡短期大学の礎を基に大いに発展することを切に願っております。高岡短期大学は、私にとって一番想いで深い勤務地となっております。



高岡短期大学でのスキー

名誉教授 倉田久敬



個人的なことをいうと高岡短期大学での大きな楽しみの一つにスキーがあった。いろいろな先生方、また事務部の方々とスキーの思い出は尽きることがない。小松研治先生とは私の富山初期のスキー行とは切り離せないし、鶴田彦夫先生とは白馬周辺によく滑りに行った。長山信一先生とはスキー場トップの雪上で広げた昼食を思い出す。退職前数年は蠟山昌一先生、近藤潔先生と共に、テレマークスキーで山に入ったことを懐かしく思い出す。また、前田一樹先生とは立山弥陀ヶ原の春スキー、堀江秀夫先生とは高谷池から火打山への山スキーを思い出す。事務部では小路隆さん・田中輝和さん・山本さん・安土さんほかの方々が懐かしい。今でも近藤先生とはテレマークスキーでお付き合いを頂いているが、ここでは個人的レベルでの思い出ではなく、高岡短期大学でのスキー行として、多くの方々と共通の思い出を語ってみたい。

1 スキー同好会のこと

私が高岡短期大学に奉職したのは平成3年からであったが、その当時事務部の職員の方々を中心としたスキー同好会という会があった。今となってはスキー同好会というのが正式の名称であったかどうかは定かでないが、学生課の方々が中心となって毎月積立を行っていたようである。学生課は日常的に学生が入り出して忙しい部署であるが、2月は入学試験があり多忙を極める。したがってスキー行は1月中旬の連休ということに決まっていた。

平成4年のスキー行は信州の梅池高原であった。その冬は雪の多い年で、私の車は4WDでなかったこともあり、宿舎では駐車場への車の出し入れに苦労したことを記憶している。早朝短大の駐車場に集合して数台の車に乗り合わせて出発するのであるが、スキーを積んだ車で高速道路が渋滞して、梅池高原スキー場についたのは正午過ぎであった。当時はまだスキーはメジャーなウィンタースポーツで、スキー場でのリフト待ち30分などは普通のことであった。今昔の感一入である。当時はモーグルも始まったばかりでやる人はほんの一握りであり、八方尾根スキー場の兎平や黒菱も未圧雪の急斜面というだけで滑りやすかった。ただ、梅池高原スキー場の馬の背コースは、今ほど広くなく当然圧雪してないため、ず

いぶん滑りにくい難コースであったと記憶している(コース幅が広げられて一時は滑りやすくなったが、最近はコブがひどくなって昔に増して難しいコースになったようである)。教員の参加者としては藤田徹也先生の名前を思い出す。

その後同好会は志賀高原や梅池を中心に4年余り続いたが、学生課の方々の転勤等で旗振りをする人がいなくなって自然消滅するにいたった。

2 歩くスキー(クロスカンリースキー)

高岡にきて驚いたことのひとつに、富山県の人でスキーをする人が非常に少ないということであった。富山県出身の学生の多くがスキーをやらず、むしろ他県出身の学生のほうがスキーに積極的であったように思う。そんなこともあって歩くスキーをやってみてはということで、平成7年であったかと思うが学生課にお願いして歩くスキーを20セットばかり準備していただいた。学生に興味を持たせるにはやって見せなければと思い、何人かの先生方を誘ってグランドで滑走を始めた。そのとき誘いに乗っていただいた先生が近藤潔先生、長山信一先生であった。

毎日昼休み30分あまりの時間、グランドに付けたトレースに沿って滑走した。そのうち産業工芸学科の小林君という学生が興味を示してくれて一緒に滑ったが、ほかの学生はほとんど興味を示してくれなかった。思えば北陸の人たちは毎冬豪雪に痛めつけられ、雪=除雪という図式が出来上がってしまったのであろうか。富山県出身の学生に尋ねても小中学校で体育の時間にスキーをやったという者はほとんどいなかった。雪国に住んでいてその雪を活用しないのはもったいない話だと思うのは私だけであらうか。

その後年々雪が少なくなり、グランドに雪が積もらなくなって、歩くスキーもできなくなった。

3 蠟山先生とのスキー

蠟山昌一先生が第3代学長として高岡短大に赴任されたのは平成10年4月であった。

新しく着任された教職員の歓迎会を食堂で行うようになったのは、いつ頃からだったのだろうか。その年も例

年のように、例年のような食べ物で開かれた。その席上 蠟山先生は自己紹介で、自分はアウトドア派であり山登り・釣りを楽しみに高岡に来たと話された。スキーのことは話されなかったと記憶しているが、5月連休の立山春スキーにお誘いしてみた。蠟山先生はすぐ話に乗って来られ、「女房を連れて行っても大丈夫だろうか」といわれた。雪が腐って重くなっているがシュテムボーゲンが確実にできれば大丈夫ですと答えたが、ご都合がつかなくて結局奥様は参加されなかった。参加者は教員ばかりであったが、鶴田彦夫先生、近藤潔先生、長山信一先生、小松研治先生、藤田徹也先生、内藤裕孝先生ほかのお名前を思い出す。

弥陀ヶ原から天狗平の間を途中美松(地名としての美松坂ではなく関学ヒュッテ近くの臨時バス停)を経由して1時間に1本の割でスキーバスが運行されていて、これをスキーリフト代わりに使って遊ぼうというものである。

当日朝6時ごろケーブル立山駅に着いたが既に駐車場は満車で、称名川沿い奥の臨時駐車場に置いて、スキーを担いでの歩きを覚悟したものである。その時、ふと「登山研修所に置くことができれば便利なのだが」と漏らすと、蠟山先生が「よしそこに置こう」と言われた。「でも先生一般車は駐車禁止ですよ」「わしが話をつける」というわけで、研修所への坂道を登ったのだが研修所の門は閉まっている。「やっぱりだめですね」「その門脇に置けないか」「置けば置けますが」「わしの名詞を貼っておけばよい」という蠟山先生の決断で、ダッシュボードの上に名詞を置いて、片道20分の歩きを免れることがで

きた。蠟山先生の茶目気たっぷりの人柄を知ることができた懐かしい思い出である。翌週事務部の職員の方々から、「遅くとも朝5時には着いていなければ駄目ですよ」とからかわれたが、ケーブルの始発時間が7時半発という事を考えると当時は随分と客が多かったことになる。ちなみにスキーバスは1台に乗り切れず、2台3台と増発されたことを考えると今昔の感を深くする。

蠟山先生の発声で一時途絶えていた事務部のスキー行が、その次のシーズンから赤倉の上越教育大学ゼミハウスを使って復活した。参加者は庶務課、事業課、会計課、学生課の方々、教員では前述の先生方のほか学長夫人、副学長であった行田博先生や小松裕子先生のお名前を思い出す。最初のシーズン(平成11年1月)はナイターに行こうというわけでスキーを担いで「くまどスキー場」までの上り坂を30分余り歩いたが、時間が遅かったのでナイター照明が終わってしまっていた。さて帰り道、蠟山先生をはじめ数名の方々が下り道を滑るということで滑走を始めた。私はカリカリに凍った坂道が怖くてゼミハウスまで歩いて帰ったが、帰り着いてみるととっくに着いているはずの滑走組が着いていない。おかしいなと思っていたところ10分あまりして帰ってきて、道を間違えて下のほうまで滑り過ぎたという事であった。道路を滑ることが可能であった当時とはいえ、ここにも蠟山先生の茶目気を見る思いであった。

赤倉でのスキーは3シーズン続いたが、蠟山先生の健康から中止の止む無きにいたった。今となっては貴重な思い出として懐かしく思い起こされる。

出会い、出会う。

私が高岡短期大学に就任した平成9年は、専攻科棟が竣工し大学の設備が完成した年でした。しかし周知の通り、その後、再編統合にむけて大きく変って行くことになります。16年3月までの7年間は、宮本学長、蠟山学長、西頭学長と、敏腕でご誠実な先生方にご指導をいただきました。ことに西頭学長には、わずか数ヶ月のご縁でしたが、「物造り」の立場をご理解いただき、退官間際の忙殺の日々ではありましたが、充実した高岡での最後の時間を過ごすことができました。

大学での任務は「忙しかった」の一言に尽きますが、

名誉教授 根本曠子

今になればすべてが良い出会い、経験の連続であったと実感しております。昨年4月に帰省し早一年たちましたが、まだついこの間のことのように、時々、会議に遅れた夢などを見て、はっとする事もある状態です。作品の制作をしながらも、新しい役職(文化財団理事)、仕事場の整備、物の整理にと、相変わらず忙しい日々は続いております。

さて、楽しかったこと、辛い思い出などは、とりあえず夥しい資料や記録とともに、箱に詰めて持って帰りました。懐かしむ前に、これからじっくり時間をかけ、反

省も兼ねながら、新しい技法や授業内容などを纏めようとしているので、この度は私が、高岡短期大学と「出会う」ことになったいきさつからお話させて戴きます。

平成8年8月に58歳という年齢で大学教授のお話を頂いた時には、大変光栄ではありましたが、何しろ経験がありません。半世紀に近い年齢差の学生さん達を指導するのも、会議で発言するのも、まったく別の世界の事と言う認識しかありませんでしたから、直ぐに辞退申し上げました。「唐突な事でしたので、多分そう言われると思いました。まだ時間はありますので、もう一度ゆっくり考えて下さい」と漆芸の教室の先生方からのお言葉をいただきましたが、改めて考えるほどに身に余るお話で、世間ではリタイアの時期に、今更国立大学の教授になるなど、予測も想像もつきません。今度は一字一句に気を使いながら「せっかくではあります……」と再び辞退の手紙を書きました。

当時の私の状況とは言いますと、24歳から創作活動は続けてはいたものの、子育てや老人介護の兼業主婦でもあり、それに40代の終わりに大病をして、物を造ることは、心の安らぎを得るため、元気になるための拠りどころでした。おりしも父を見送り、息子が世帯を持ち、主人が退職、私も何とか健康を取り戻して、誰に憚ることなく、ようやく本腰で仕事が出来ることが廻ってきたとばかりに、仕事部屋の増改築をしたところでした。

しかし運命といったら大げさかもしれませんが、同年10月18日のこと、金沢で所要を済ませた後、帰りは山道を通って、紅葉でも見ながら何処かに宿泊して……と車を走らせていたところ、スーパー林道の標識が目に入りました。思いがけず素晴らしい景色に出会い、山道を降りて白川郷に出ました。そして福光から高速道路に乗ると高岡方面と能越道路の案内が出ていたではありませんか。「ここまで来たのだから挨拶だけでも」ということになり高岡へと。大学に着いた頃はもう夕方でしたが、乳白色の校舎に、紅葉が美しく映え想像していたイメージとはだいぶ違いました。蜷川先生や横山先生には初対面でしたが、穏やかなお人柄で、学生さん達も明るく素直に「こんにちは」と人なつこく挨拶してくれました。実技棟やコンピューター室を案内していただくうちに、漆工芸の地盤である北陸の、最新の設備を持つ新しい大学で、若い人達と仕事をして見たい、一から出直すつもりでやれば出来るかも知れないと、半分夢気分でした。

11月に入り、辞退の手紙も出してしまっていただけに大学の話は忘れかけていた頃、「考え直していただけましたでしょうか」と林暁先生から電話がありました。返事を口籠っていると、いきなり「書類は実積の写真入り

のファイルが3冊と……」と矢継ぎ早にいわれ、いつの間にか「はい」と言っている自分に気がついたときには、「えらい事になってしまった、もう後には引けない」と複雑な気持ちでした。漆コースの先生達には、本当に誠心誠意助けていただき、無事定年まで勤めることが出来ました。



ことに平成15年度は、再編統合も大詰めになり、蜷川先生の退官記念パーティー、卒業生の展覧会、蠟山学長のご逝去、横山先生の遺作展、地域を繋ぐ漆芸展、私の退官記念展と、盆と正月とお祭りが一度に来てしまったような年でしたが、少ないメンバーで結束し、学生さん達の力もかりて、本当に良くしていただきました。

大学では、会議や年間を通しての行事だけでも多くの時間が費やされますが、私の一番の仕事は学生達の実技指導。後期の卒業制作や学士修得の制作の期間は、土日返上でした。ドカ雪が降り、毎年成人式に出られない学生さん達とささやかなお菓子でお祝いをする頃には、意志の疎通が出来てお互いに真剣勝負になります。物造りのありがたいところは、時間はかかるけれど、言葉はいらないこと。言い訳がましいことを並べている段階では何も進まないと悟るあたりから急に集中力が出てきます。教える側も楽しくなり、達成感と喜びを分かち合えるのは、教師冥利につきました。一石二鳥と言うわけには行きませんが、物造りの楽しさ辛さを知り、素材と技法に謙虚でさえあれば、どんな職についても、家庭に入っても、常に充実した人生を送れるのではないのでしょうか。

「一生懸命やった事に無駄はない」と自分にも言い聞かせながら、私の制作は宿舎に帰り仮眠をとってからでした。食卓をかたづけて、シートを敷き、なるべく音を出さないようにしながら、時には明け方になってしまうこともありました。富山に来て新しく出会ったモチーフや素材に感動し、造りたい、造られずには居られない気持ちになり、その気があれば何時でも何処でも、出来ることも実感しました。大学には才能豊かな先生が沢山おられ、種々な分野の方々とふれあう事が出来て、視野が広がり、パワーを沢山戴きました。また毎年行われた公開講座や伝統工芸富山支部の研究会、デザインセンターの講習会などで高岡週辺の「工芸を愛する人々」と、同じ目的を持って意見を交換し合えたのも、楽しかった

し、北陸ならではの、人情やうまいものは、忘れられない思い出になりました。

就任前の秋に見た大学は、一年中で一番美しく見える時期でありました。7年の在任期間中は山あり谷ありと

いろいろありましたが、高岡短期大学で過ごした年月は、これからも私の中で輝いていくことでしょう。学生さん達にも、大学生活が一生心の支えになる事を念じて、新学部の一層のご発展を願うばかりです。

横山幸文先生からの思い出

横山先生は漆工芸コースの中で、なくてはならない存在でした。何より、学生たちのことを親身になって思い、面倒見もよく、学生たちからも父親のように慕われていました。

そんな先生が亡くなられたのは、平成十四年の十一月十一日でした。その四日前の十一月七日は大変寒い日でした。学内の会議を終えて、さらに、学外での懇親会へ向かわれようとして、慌しく準備をしておられるときに学内で倒られました。私たちにとって、大切な先生の死は受け入れがたい悲しみでありました。突然の訃報に多くの卒業生も驚きと深い悲しみで、後日の井波瑞泉寺での告別式には何百人の参列者が訪れ、その中に多くの卒業生の姿がありました。各学年で同窓会のような輪が講堂一杯に広がっていた光景が今もはっきりと思い出されます。

また、一年後、平成十五年の十一月五日から十一日にかけて、先生の制作を通してその作品に向かう姿勢に触れ、追悼する遺作展が本学ホワイエと展示室に於いて開催されました。その作品の中に広がる風景は、先生が肌で感じ、こよなく愛された富山の自然が鮮やかに表現されていました。先生の漆芸作品は漆の持ち味を生かしながら、鮮やかな色使いで、すがすがしい自然の風景を色漆や金銀螺鈿等の工芸材料を駆使しながら行う、明快な面構成による叙情的な空間表現です。見ていると誰もが心の中に持つ原風景の中にいるようで深い安らぎと懐かしさが伝わってきます。同時に、先生の優しいあの笑顔が浮かんできます。

その折に刊行された作品集の巻頭に、先生の漆芸の道における恩師である東京藝術大学名誉教授で日本芸術院会員の高橋節郎先生から頂いた言葉があります。その中の一文に産業造形学科の教授として、多くの学生に囲まれながら情熱を燃やし誠意を尽くして指導に当たられていた横山先生の姿について、「このことは、我が家に立

産業造形学科助教授 齊藤晴之

ち寄り芸術について語り合っている折に学生について話をする時の幸文君の手つきや笑顔が一段と印象的であったことから教育現場に立った経験を持つ私にはよくわかった。」というところからも、その姿が懐かしく思い浮かびます。



(故)横山幸文先生と学生たち

富山の自然風土をこよなく愛す。特に山登りが得意で富山県の体育大会のでは競技委員を長く勤めておられました。春になると井波の周りの山々に若葉が芽吹き、その声を聞くと朝早く山菜を摘みに行く。秋になると地元ではコケ採りと称して、近くの手へきのこを取りに出られる。そんな折に、山々の眺望が開け、朝日の中にシルエットが浮かび上がる山並みの稜線、遙かに見下ろす砺波平野の散居村の有り様は、まさに横山先生の作品そのものであります。今でもそのような風景を見るたびに先生のことを思い出します。

また、先生は大変な美食家で、(といっても豪華な料亭で外食されるわけではなく)自然で新鮮な、おいしいものしか食されない。そのほとんどが地元の食材を使った奥様の手料理で、そんな心のこもったお弁当を暖かい日差しの中で学生たちとキャンパスの周りに広がる芝生に出て会話を弾ませながら食べておられた姿が今も思い出されます。そのようにして、漆制作のこと意外でも学生たちが生活全般についての悩みなどを相談していたようです。

富山県においても工芸美術のいろいろな役職についておられ、大変忙しいようでした。しかし、そのような場においても温厚な人柄は周囲から人望が厚く、日展や現代工芸美術展といった制作活動の場においても、多くの地元若手作家たちが展覧会前になると先生のお宅を訪れ指導を受けました。そんな折も快く、自分の制作の手を止めて、親身になって指導されました。技法のことや発想のまとめ方についての的確な指摘を受け、行き詰った考えに光明を得たことが幾度あったことか。そんな時、先生の

アトリエには展覧会出品に向け、今まさに制作中の漆屏風の原寸大図案が壁面一面に張っており、これから塗られよとする、ブルーや朱の色がグラデーションに何色も調合され、そんな色漆の絵皿が所狭しと並んでいました。

高岡短大において先生から頂いた思い出は皆さんの心のなかにも印象深く尽きることなく思い浮かぶことと思います。本学が二十周年を迎え、その中で横山幸文先生から頂いた多くの思い出や感動を心から感謝します。

シロウトが語る『映画芸術論』 —高岡短期大学における最後の入学式式辞から—

高岡短期大学長 西頭徳三

小学校高学年の頃のこと、映画を観た夜寝床に入っても、あるシーンが頭から離れない。やがてそれが黒澤明の作品だと分かった。以来、私は監督名で映画を選び、黒澤映画を繰り返し観るようになった。

高岡短期大学エントランス・ホールの作品展で、ある芸術系の先生から次のように諭された。「芸術の分野では誰もが素人。各自の『芸術論』を語ればよい」と。そして、平成17年度本学最後の入学式で、私は近年のアニメ映画の台頭について話した。ここで、ひとりのシロウトが語る『映画芸術論』と題して、黒澤明、宮崎駿の作品をめぐる三つのテーマについて書いておきたい。

●映画監督の要件：「真の自由人」

映画の醍醐味は、時空をひょいと飛び越えられる点にある。過ぎ去った出来事が目の前で生きいきと再現される。全く想像もできない未来の姿が具体的に描かれる。観客はその映像が真実に近いほど深く感動する。反対に、その映像が現実離れし奇想天外なものであればあるほど、観客は大いに満足する。とにかく映画は、面白くなければならない。

映画監督とは、夢に耽る能力に長けた人だ。なにげない当たり前の風景に、人工的なシーンを組み合わせて、自分の夢を映像化する。シナリオはそのための基本的な設計図だ。演出は出演者たちが最も本当らしく演ずるための一手段に過ぎない。個々の映像は最後の編集作業を経て、一本の映画に結実する。とにかく映画には、夢がなければならない。

映画監督はまた、あらゆる思想や表現方法を自由自在

に駆使できなくてはならない。そのため、歴史、哲学、文学、絵画、演劇、音楽、写真など、芸術文化百般に通じ、政治、経済、世間ばなしなど、常に世の中の動きに敏感でなければならない。その意味では、映画監督には、もの知りで総合芸術家としての高い資質が求められる。とにかく映画は、知らないことを教えてくれる先生でなくてはならない。

そして最も重要なのは、夢を映画化できる強い意志が必要なことだ。黒澤明は、何ものにも囚われず、妥協をせず、とことん映像美を追求した。そのため、ある時期「完全主義者」「黒沢天皇」と揶揄された。彼は映画づくりで「真の自由人」を貫徹した。

世界の映画界を変えた映画監督として、私は三人を挙げることができる。エイゼンシュテインは、『戦艦ポチョムキン』『イワン大帝』などモンタージュ理論により、見世物だった活動写真を「映画」に変えた。チャップリンは、『街の灯』『モダンタイムス』『独裁者』などの警世的な演出と表情豊かな演技により、映画を「大衆化」した。そして、黒澤明は、大衆のものとなった映画を『羅生門』『七人の侍』『赤ひげ』などにより、「芸術」にまで高めた。

ところが、三人の監督の強固な創作意欲にも関わらず、政治的な干渉や経済的な制約がその制作活動を阻んだ。エイゼンシュテインは、スターリンから「芸術家はマルクシズムを研究すべき」と忠告され、内容の変更を求められた。チャップリンは、非米活動委員会の召喚を拒否し、1952年アメリカを去った。黒澤明も、観客の急減と映画産業の縮小により活動の場を著しく狭められた。

映画芸術は、社会的矛盾を暴露し批判することで大衆から支持され、芸術分野の中で一橋頭堡を築いてきた。その反面、政治的影響力の大きさや経済的コスト負担の莫大さのため、制作活動が規制されるようになった。これは総合芸術である映画の宿命かも知れない。

●黒澤映画の創作基盤：「日本の伝統文化」

黒澤明は、世界の映画界に計り知れない衝撃を与えた。スティーブン・スピルバーグ、フランシス・F・コッポラなど、数多くの海外の監督は、黒澤作品から影響を受けたと公言してはばからない。ジョージ・ルーカスは語る。『『七人の侍』は私に途方もない衝撃を与えた。私はそれまであのような力強く、しかも映画的なものを観たことがなかった。その瞬間から、私の創造的なインスピレーションの最も力強い源泉のひとつになっている』と。ケビン・コスナーも『七人の侍』を30回以上観たと告白する。

黒澤明も、ドストエフスキー、ゴーリキー、シェークスピアなど外国文学から大きな影響を受けた。黒澤は自らのテーマを映像化するため、その原作を自由に外国文学に求めたが、まず原作の模倣に始まり、やがてそこから完全に脱却して自分流の作品に変えた。シェークスピアの四大悲劇の一つ『マクベス』は、「人間の弱さ」を物語る戦国時代の『蜘蛛巣城』に変わった。『リア王』も、「人間の愚かさ」を繰り広げた戦国時代の『乱』となった。彼は換骨堕胎の名人だった。

1950年に製作された『羅生門』は、戦後日本映画が欧米を越えた画期的な作品だ。翌年、ヴェネチア国際映画祭金獅子賞、米アカデミー賞外国語映画賞を受賞した。当時外国の批評家は、日本映画と聞くだけであくびをする始末だった。しかし、この黒澤作品が上映されると、雰囲気はがらりと変わり、終わったときには、みんな雷に打たれたようだったと伝えられている。この原作は芥川龍之介が12世紀の説話集『今昔物語』から題材を得て書いた『藪の中』だ。そのため、黒澤明は、この日本映画の芸術的価値を認めたがらないわが国の批評家たちと闘わなければならなかった。海外での受賞理由を「日本的、東洋的エキゾチズム」に求めたからだ。

黒澤作品は、「日本的」であったがゆえに、「世界的」に高く評価された。映画に限らず、いかなる芸術作品も制作者の現在の生き様や生まれ育った環境を無視して語れない。芸術文化的な創造とは、制作者が寄って立つ歴史的・文化的・風土的な基盤の上で、ゆっくりと醸成された作家の知性と感性の融合作用だ。黒澤明は映画制作の場に日本の伝統文化を大胆に導入し、その成果を世界に発信し続けた。

●宮崎アニメの美しい警鐘：「身近な自然対話による感性の回復」

宮崎駿監督『となりのトトロ』をはじめて観た時、私は1950年代後半の東京郊外の風景や二人の女の子のいる家族の姿が詩情豊かに描かれていて感動した。ある新聞で二歳の幼女が毎日、しかも一年中「猫バス」のシーンを繰り返し観て、ニコニコしているという記事を読んだ時も、さもありなんと思った。しかし、この映画に対する私の評価は、レベルが高いという程度であった。

ところがその後、トトロの数年前に制作された『風の谷のナウシカ』『天空の城ラピュタ』を見た時、私はびっくり仰天した。内容の斬新さもさることながら、宮崎監督が私と同年代であったからだ。あのような明るく夢想的な創造力は、私の身体のどこからも湧いてこない。同世代にあのような発想ができる人がいる。私は愕然とし、数日間、ショックは治まらなかった。

宮崎アニメは世界の映画界を一変させた。『千と千尋の神隠し』は2002年度ベルリン映画祭金熊賞を受賞し、2003年度アカデミー賞長編アニメ賞に輝いた。宮崎駿と云うたった一人の監督の才能が新たな映像文化を創造した。この驚きは50年前の十代の後半、黒澤明『七人の侍』に出会った時の衝撃に似ているが、自分の創造力の衰微、限界を見せつけられたようで実に複雑な気持ちだ。

私のもっぱらの関心事は、創造力に対する知性と感性の関わり方にある。宮崎アニメに出会ってから、私は、特に現代人の感性のあり方に問題があるように思われてならない。映画は時代の風潮を反映し、観客はそれに敏感に反応する。宮崎アニメに対する観客の強い関心は、日常生活で満ち溢れる情報・知性過剰への反動とも考えられる。バーチャルな世界で生きる人々が、自然に育まれた人間の本来の感性の枯渇を感じはじめ、それを宮崎アニメに求めているように、私には思える。

われわれ現代人は、人間の本来の感性をどう取り戻すべきか。それには自らの「五感」を最大限度まで活用するしかない。最低一日・五回の小さな感動を体験する。春の立山連峰を遠望して感動し、川のせせらぎに耳を澄まし、雪解け水の冷たさに触れて感動する。春野菜のがみや香りに感動する。小さな感動の積み重ねが、われわれの知性と感性のバランスを回復させる。

宮崎アニメは、身近な自然との対話で感性を回復することの大切さを映像化した。黒澤映画は、創作基盤としての日本の伝統文化の重要性を映像化してくれた。いずれの作品も、最後まで映像美を追求する、芸術家の自由で強固な意志から生まれたことは言うまでもない。

私には、このような創作姿勢はあらゆる場に共通するものと思われるが。

回 想

事務部長 榎山登志雄

平成16年4月1日に高岡短期大学の第10代目の事務部長を拝命いたしました。高岡短期大学と富山大学、富山医科薬科大学の統合により、高岡短期大学最後の事務部長となります。

高岡短期大学に赴任しました時には、既に「富山県内国立大学の再編・統合合意書」が締結され、「再編・統合による新大学像」による「新しい大学の基本理念」の実現にむけた組織と運営方法の体制を確立することに焦点が当てられていました。また、高岡短期大学では4年制の芸術文化学部を設置準備が同時に進められていました。

新学部の設置には、文部科学省に置かれる大学設置・学校法人設置審査会において、新学部の理念・目的・教育方針、授業実施体制、カリキュラム、授業担当予定教員の研究等実績等の審査を受けなければなりません。設置審査会に提出する書類は、文部科学省の指導を受けながら作成する段取りであったようでしたが、文部科学省においても本学においても16年4月に文部科学大臣が設置する大学から国立大学法人が設置する大学への移行が優先課題であったことも影響して、設置関係書類の準備に遅れが生じていました。

作業の遅れを取り戻すため、4月から5月の連休期間中にも、また、5・6月の休日にも作業を続けるなど精力的な頑張りによって6月末の提出期限に間に合うことができました。私はこれらの作業を見守るだけで、ただただ担当職員には体調を壊さないで作業が終了することを願うだけでした。

また、新学部の設置と3大学統合の経費については、国の予算要求のスケジュールに沿って行われ、大学から文部科学省に対する17年度予算要求のヒヤリングが7月上旬に設定されました。設置関係書類の作成を始め新学部の基幹的なとりまとめがこの時期に集中して行われました。経費要求については、担当職員は8月まで文部科学省の予算担当官に個別説明を行うなど精力的に動きました。

この時期の頑張りによって、設置審査関係書類に大きな変更も無く「設置を可」とされました。また、芸術文化学部のための設備費・施設改修費もほぼ認められました。

5・6月頃に集中して行われた教職員の会議・打合せは、学生には特別なものと感じていたのではないでしょ

うか。昼休み時間に開催した会議を終え廊下を歩いていましたとき、「このごろ会議ばかり開いている」と学生の話し声が耳に入りました。この言葉の意味をあれこれ考え複雑に受け止めました。

昨今の就職状況はとても厳しい状況に置かれ、各大学とともに苦心しています。本学では幸いにも平成15年度卒業生の就職希望者は、全員就職できました。また、16年度の就職希望者も99.4%に達しました。これは学生の努力によるところではありますが、一方では、卒業生が企業内で評価されていること、また、学生定員が少ないことで個別指導ができることではないかと思えます。学生課職員は全学生の顔と名前を覚え、学生の特徴を掴み、接しています。また、常に進路指導担当教員と就職担当事務職員が学生の希望職種や就職内定状況に関する情報を交換し、未内定者には事務職員が精力的に個別指導をしたことなどの取組みが現れているものと思えます。

「地域に開かれた特色ある国立短期大学を目指す」ことが本学の建学の趣旨であり、ものづくり(木工、造形絵画、アクセサリー)、パソコン操作、外国語会話、簿記、教養等の講座や研究者・技術者のための講座を提供しています。

また、エントランスホール(TSUMAMA-HALL)ではしばしば、伝統工芸士の実演・作品展示、教員・学生の木工、漆、アクセサリーなどの作品展示、学習成果の発表など行い、本学関係者を始め、地域の方々にもそれらの作品を紹介しています。素人の私には学生の作品をプロの作品と比べても遜色ないでさえ感じられます。

幸いにも平成16年度には、文部科学省が公募しました「特色ある教育プログラム」には「学内を学生作品で埋め尽くそうプロジェクト」が、また、「現代的教育ニーズ支援プログラム」には「炉端談義方式」による地場産業活性化授業」が採択されました。「現代的教育ニーズ支援プログラム」では、「地域活性化に役立てる」ことを本学のカリキュラムに反映させるため、地域の職人や行政機関と本学の教職員・学生による委員会を設置し、地域ビジネス、デザイン及び産業造形の各学科のカリキュラムの組み立てを紹介し、また、地域が抱える問題等も議論されています。

このほかにも、日本とフランスの専門家と市民が景観

について考える国際会議「日仏景観会議・高岡」が行われました。これには高岡市の行政・経済界、建築関係団体、地域住民が参加し、事務局は本学に置かれました。

平成16年度は3大学の統合と新学部への設立に向けた準備が進められるなか、作品展示、教育プロジェクト、国

際会議を通じて大学から地域への情報を発信し、地域との連携が活発に行われました。地域にまかれた種を組織としてどのように収穫するかにより、高岡短期大学が4年生大学学部として発展するかの試金石となるものと思えます。

卒業生の回想

第一回上野座談会レポ

専攻科 産業デザイン専攻 平成12年修了
野田由紀子×升井チサ

升「元気ですかァ〜！」(猪木口調で登場)

野「ガハハハ〜久しぶりー。わざわざ病院まで来てもらってすまんねー。」(出産準備のため都内病院に入院中)

升「遅ればせながらおめでとうございます。」

—久々の再会のところ申し訳ありませんが…いきなり本題です。お二人が卒業されはや5年、当時流行っていた物や事といった何を挙げられますか？

升「パフィとか？当時、牛乳配達のパイトしてたんだけど、スパイラルパーマのアイロンヘアーでお客さん宅周りしてたな。そういえば、ある家を開けた途端『うわ！パフィ！』って言われたのを思い出した。」

野「うわ！パフィ……。そうだったね、今の黒髪じゃ想像つかないけどあの頃は皆何かに憧れて色変えてたなァー、赤とか緑とか。」

升「ヒラキストアで安いの買ってね(笑)。私はピンクに。まずいよ、ホント。」

—では、印象に残っている人物は？

野「フィンランドの留学生達はヤクソバ UFO にお湯入れてすすってたよね…。」

升「あれはキョーレツだった！作り方を説明しても聞く耳もたないし、逆ギレされたよね。」

野「でもお陰様でこれが異文化交流の第一歩となったわけだ。」

—4年間の学生生活を振り返ると？

野「専攻科では放送大学で学位取得もあって、課題は多いわ、試験は難しいわで…超ハードだけにハーバードだったよねえー。あ！でも最終試験は東京大学でやったんだっけ？ガハハハ〜。」

升「ええと…ボケ倒しは放置。もたついていますね。」

野「こらあ〜。(笑)」

升「社会人になって思ったのが、美術系大学のカリキュラムにしては結構実践的だったとを感じるな。いきなり担当任されてもさほど抵抗なく初仕事に取り組めたかも。もちろん学生の時に学んだ事がまんま社会で活かされたわけではないけど。」

野「そうそ！良いこと言うねえ！どうせなら場所変えて久々に呑みながらとことん語っちゃう？」

升「…ってかアンタ、妊婦だし。しかも入院中だし…。」

話は尽きない様子のお二人。また何年後かに第二回目が開けると良いですね。



略歴 野田由紀子 平成12年 株式会社メガハウス入社【第一事業部 OEM チーム配属】 憧れの BANDAI グループで憧れのお菓子のオマケの企画を担当すること4年と10ヶ月。天使のマークでおなじみの某菓子メーカーの OEM 商品を主に手がける。(主な商品)・一斉を風靡した対戦式コマチョコスナック・ゴム船長率いる海賊団チョコスナック・5色の特撮ヒーローウェファーチョコ etc. 17年 株式会社メガハウス退社 玩具を創るつもりが、子供を作って一月末に退社。主婦&育児にこの身を捧げる…。 升井チサ 平成12年 株式会社コア・アド・インターナショナル入社 (グラフィックデザイナー)【デジタルメディア部所属】 映像、WEB等デジタルメディアコンテンツ全般のグラフィック映像、WEB等デジタルメディアコンテンツ全般のグラフィック制作。限定された媒体の狭さに限界を感じ、不完全燃焼。【海外制作部移動】 SONY、KENWOOD、VICTOR等の海外向けポスター、カタログ、POP等、紙媒体のグラフィック制作。国内で自身の制作物が見られないと、また不完全燃焼。14年 有限会社ユナイテッドデザイン入社 (アートディレクター) 紙媒体にとらわれず、空間スペース、コンサート、イベントキャンペーン等 幅広いデザイン・企画のディレクション。いっちょまえに芸能人と仕事するようになるも、これまた不完全燃焼。

回 想

専攻科 産業デザイン専攻 平成13年修了
清水亜利沙

以下の文章は神田川：かぐや姫 のメロディでお読みください。

(デザイン科の方は1年最後のクリーナーもしくはドライヤー制作を思い出しながら…)

貴方は もう忘れたかしら…
白い手拭い 頭に巻いて
二徹で行った 小さな購買
「ワリカンで払おうね」って 言ったのに
いつも私が 払わされた
長い髪が芯まで冷えて
小さなラッカー カタカタ鳴った
あたなはわたしの顔を見上げて
「眠たいね」って 言ったのよ

若かったあの頃 何も怖くなかった
ただ最終プレゼンが 怖かった…

貴方は もう捨てたのかしら
無色透明の メディウム買って
徹夜で刷った シルクスクリーン
なぜかみんな 無言で作業
締め切り直前 三徹過ぎた
窓のむこうには 二上川
23人一部屋の 小さな教室
貴方は 私の顔を見上げて
「お腹減ったね」って 言ったのよ

若かったあの頃 何も怖くなかった
ただ最終プレゼンが 怖かった



『産デは体力！』学生の頃はそう言っていた。怒涛の二年間。金曜日に課題を出され、月曜にはチェック。そんなバカな？！休みの日にやれってことか？！と内心憤慨していた(のは私だけじゃないはず！)。そう。体力の無い者には続かないのである。

しかし社会人4年目の今となっては『デザイナーは体力！』だと思っている。実はデザインの世界って、ものすごく体育会系！結局思うところは学生の頃も今も変わってなかったりする。

現実社会とのギャップを埋めてくれた先生たちに感謝！する今日この頃。

略歴 平成10年度産業工芸学科産業デザイン専攻卒業生。産業デザイン専攻科卒業後平成13年4月(株)DUO プロダクション入社。現在コンテンツディレクターとして、生きたWeb制作に励む日々。



回 想

専攻科 産業造形専攻
平成13年修了
藤田いづみ

木材工芸学科に入学して、私が初めて作成したのが、これからの木工作業に使用する道具をすべて収納してくれる道具箱作りでした。クラス全員で製材された材木から、選ぶポイントを聞きそれぞれ作る道具箱の材料を選び出しました。そして、加工が始まりました。初めて使用する大型の機械や作業に最初は戸惑いましたが、機械の使い方を覚え、自らが使用して材料が次々と変化していく様子に感動しました。

一番大変だったのが、刃物の研ぎ方でした。すぐには使えない刃物達を仕上げるまでが大変でした。力を均等にかかることの難しさ、なかなか思うように平には出来ません。時間もかかりましたし、手も真っ黒になりました。夏休みにも刃物を研ぎに学校に通った思い出もあります。そのうちに慣れてくると、この刃物を研ぐ時間が気分転換にもなり、気持ち落ち着けられる時間になって行きました。

道具箱の完成が近づくにつれて、細部にも気にかける様になり、完成と思えるまでに時間が掛かりました。ものの作りの時間のかかる事を知り、市場に出ているものの価値観が変わりました。そして、自分の挑戦してみたい事もでき、大変に満喫した学校生活を送ることが出来ました。その中で、同じ興味を持った仲間達と

出会うこともでき、共に勉強できて良かったと思います。そして、今も交流が続いていることに感謝しています。

略歴 産業工芸学科木材工芸専攻、その後、専攻科産業造形専攻に在籍。現在、石川県にある株式会社竹松家具に就職。



思い出

ビジネス外語専攻(中国コース)
平成13年卒業
宮本久美子

「うっやバイ…中国語の前に富山弁がわからない…(泣)」

そんな不安を抱えて始まった学生生活でしたが、そんな不安も何のその、すぐ友達もでき、楽しい二年間が過ぎました。

思い出に残っていると言えば、やはり中国での語学研修のこと。二月だったのでまだ寒く、眠い目をこすりながら毎日早起きをしてみんなと太極拳をしました。毎日続けていたわりにはいっこうに便○には効果をなさず、人知れず悩んでいたのは私だけではなかったと思いま

す。また、最終日に先生への感謝の気持ちを込めてみんなで歌った“あの素晴らしい愛をもう一度♪”はとても感動的で、研修の良い締めくくりとなったと思います。

ほかには“炊飯器でホットケーキが作れる”ということで、Y子、J子、K奈と試してみたけどうまくできず、半分ドロドロのまま食べたのも良い思い出です。

まだまだたくさんあり、あげていったらきりがなくらいたくさん思い出でいっぱいです。

今でも連絡をとりあい、悩み相談したり遊びに行ったり…私はここで素敵な友人達と巡り会えたことをとても幸せに思っています。また、いろんな面で相談にのっていただいたりアドバイスしてくださった先生方にもとても感謝しています。そして何より、ここで勉強でき、ここで学生生活を過ごせたことを誇りに思っています。

もうすぐで高短の名は無くなりますが、良い歴史と思い出を残し、また新たなスタートをきり、皆に愛される大学となることを願っています。

略歴 長野県長野市出身 平成11年4月 高岡短期大学入学(中国コース) 13年3月 高岡短期大学卒業 13年4月 嘱託社員として日本興業銀行(現在みずほ銀行)入行 14年2月 職位転換試験合格により行員へ 現在 みずほ銀行富山支店勤務(モルモットのマロンとともに楽しい日々を送っています)

回 想

経営実務専攻 平成13年卒業
北島のり子

私が短大を卒業してから4年が経とうとしています。今、思い返してみると様々な経験ができ、自由がある時だったと感じます。その中で努力していたことは、自分の知識を増やすことだったように思います。短大に入学した当時の私は、高校の同級生の多くが4年生の大学に入学する中で短大に入学した自分に劣等感のようなものを感じていました。だから誰からでも認められる資格などを取りたかったのです。

そこでまず始めに挑戦したのが英検準2級です。英語は中学3年生位から成績が振るわなくなり、高校時代は最も苦手とする教科でした。また英検は中学3年生の時に3級に落ち、高校3年生の時に2級に落ちといい思い出はありませんでした。その英語の資格を取得することにより、少しは自分に自信が付くように思えたのです。試験は見事に合格、4年ぶりに英検を取得できたのです。これにより自分に自信が持てるようになったと同時に勉強して何かを身に付けるということが楽しくなってきました。

そして、次は高校時代より勉強したかった心理学を放送大学の科目履修生として勉強することにしました。人

間がどのように考えたり、行動したりするのかを勉強し、自分という存在を知りたかったのです。この時には、心理学に関連した本も色々読みました。半年、勉強して4単位を取得することができましたが、これによりますます興味が沸き、現在も仕事を続けながら学んでいます。この他にも短大で必修教科であった簿記では、3級と2級を取得しました。

このように短大時代は自分の興味を持ったこと、疑問に感じたことに次々と行動を起こしていきました。様々な情報を得て、知識を増やせたことは、非常に良かったと思っています。また、資格を得ることにより自信が付き、自分を堂々とアピールすることができるようになりました。本当に充実した日々でした。

最後になりますが、この回想録への掲載機会を与えてくださった高岡短期大学の皆様方に感謝しております。ありがとうございました。

略歴 平成11年3月 新潟県立高田高等学校卒業 11年4月 国立高岡短期大学産業情報学科経営実務専攻入学 13年3月 国立高岡短期大学産業情報学科経営実務専攻卒業 13年4月 日本道路公団入社日本道路公団東京第三管理局佐久管理事務所勤務 現在日本道路公団東京管理局佐久管理事務所勤務(平成14年2月東京第三管理局から東京管理局に名称変更)



学生生活を振り返って

専攻科 地域ビジネス専攻 平成16年修了
竹内麻美

私は高岡短期大学で4年間お世話になりました。4年間の学生生活の中でたくさん思い出はありますが、一番心に残っているのは大連・北京へ行った中国語学研修です。私は学科と専攻科で二度行く機会がありました。

学科では初めての海外ということもあって、不安と期待が入り混じりながら大連へ行ったのを覚えています。大連外国語学院で初めての授業は日本語のわからない先生に教えてもらおうという新鮮な環境の中で、自分の思いを伝えられないもどかしさを味わいました。

専攻科のときは後輩と一緒に混じって大連へ行きました。自分の中国語が上達しているか試したかったからです。先生とのマンツーマンの授業は緊張の連続でした。ある先生は紙にいろいろ書きながら授業を進めていき、文法や発音をよく直されました。そして授業の合間の先生との雑談が楽しく、一緒に中国語の歌を歌ったりしました。その歌は『朋友(ボンヨウ)』と言って、中国では有名な歌手の歌らしく、お世話してくれた中国人学生に

教えてもらいました。

また、友人たちと過ごした時間と同じくらい先生方と過ごした時間も私にとっては貴重な思い出です。専攻科に入学してからは先生方とお話しする機会がぐんと増え、よく研究室にお邪魔しました。特に中国語コースの4人の先生には大変お世話になりました。私が壁にぶつかったときにはそっと手を差し伸べ、導いて下さいました。

社会人になってもうすぐ一年が経ちます。仕事で失敗することもたくさんありますが、周りの方々に支えていただいていると感じています。二上山の麓でのびのびと過ごした4年間は今も鮮明に甦ってきます。高岡短期大学が新学部の「芸術文化学部」に名前が変わったとしても、私にとっては高岡短期大学に変わりはありません。地域に根ざした学校として今後ますます発展していくことを願っております。

略歴 富山県立呉羽高等学校卒業 平成12年4月 地域ビジネス学科国際・中国語コース入学 14年3月 地域ビジネス学科国際・中国語コース卒業 14年4月 専攻科地域ビジネス専攻入学 16年3月 専攻科地域ビジネス専攻卒業 16年4月 第一生命保険相互会社入社



回 想

国際・英語コース 平成16年卒業
小橋千賀

着慣れないスーツに身をつつみ、大きな希望と新たな生活への不安を両手に抱えて高岡短期大学へ入学してから、はや数年が経ちました。あっという間に過ぎた2年間ですが、短大での生活は、とても充実し、自分を大きく変えることのできた時間となりました。

その理由の1つは、目標を持った、たくさんのよき友達に出会えたことです。ある友達は、造形作家になるという夢を叶えるために、毎日遅くまで納得のいく作品造りに集中していました。同じクラスでは、私と一緒に資格取得のために勉強し、時にはめげそうな私を励ましてくれた友達や、旅行好きという趣味を職業とするため努力をしていた友達にも出会うことができました。そんな目標高い友達と話すたびに刺激をもらい、私も見習おうと自らを鼓舞することができました。もう1つの理由として、以前から興味があった比較文化についての研究ができたことがあります。教授のご指導のもと、様々な文

献で、日本文化と西洋文化についてのより詳しい情報と精度の高いデータを調べました。さらに英語での執筆に挑戦したため、1年間かけて書き上げた論文はとても納得のいくものに仕上がりました。こうした授業での取り組みがあったからこそ、1つのものに対する集中力や勉強することの楽しさを知ることができ、そして何よりも、自分にもできるという自信を持つことができました。私は現在、社会人として働いていますが、短大時代に専攻した英語や新たに興味の出た分野についての勉強を、これからも続けていこうと思っています。

今、高岡短期大学は、富山大学、富山医科薬科大学との再編統合に向け、大きく変わろうとしています。しかし、学内にベンチやゴミ箱といった、本学学生の作品が設置されたり、学園祭で手作りのものがあふれたりという高岡短期大学ならではのよき特色は、これからも受け継がれていくことを願っています。これからも、高岡短大の学生であったという思い出と誇りを持って、自分の進むべき道を歩んで行きたいと思っています。

略歴 昭和58年9月1日生まれ 富山市出身 富山南高校卒業
16年3月 本学地域ビジネス学科国際英語コース卒業 16年4月
日本銀行金沢支店入行

短大生活を振り返って

経営コース 平成16年卒業
古戸美佳

私は現在、JR 西日本の京都駅で勤務しており、早1年が過ぎようとしています。私が携わっている鉄道サービス業という仕事は、特殊なイメージがあり、短大で学んだ事とはあまり関係性が無さそうに思われるかもしれませんが、私にとっては卒業研究で学んだマーケティングの知識や視野を広げる為に受講することになっていた「デザイン」で学んだ知識、「プレゼンテーション」の知識、「パソコン」のパワーポイントでのプレゼンテーション資料作りの知識など全てが現在の仕事に役立っています。

例えば、私は1月頃に「お客様が利用しやすい自動券売機にする為にはどのように改善していくべきか」を考える研究プロジェクトに参加しました。私は、デザインの授業で学んだ知識を活かして自分の意見を出したり、プレゼンテーションで発表しなければならないパワーポイントでの資料作りを担当し、私達のグループは見事優秀賞を頂きました。

私は高岡短期大学で社会に出ていく為に必要な基礎能力や知識が学べて本当に良かったと感じております。また、人生経験を語って下さったり、就職活動時に親身になって相談にのって下さったそんな温かい教授方や、大切な友人に出会えて充実した2年間でした。

これからも仕事の上で、体力的にも精神的にもつらいことが多くあると思います。しかし、仕事で与えられる課題に対し、短大生活で学んだ知識を活かして自分の力を発揮していく面白さもあります。

私は短大生活で学んだ誇りと自信を胸に、「もっと自分を試す」姿勢を持ち続けながら自分を成長させていきたいと思っています。

現況 現在、西日本旅客鉄道株式会社で勤務しております。仕事内容は、みどりの窓口で切符を発売したり、旅行業商品を発売したり、自動券売機を管理しています。同期と励まし合いながら、仕事も一人暮らしも頑張っています。



平成15年9月ごろ 吉田ゼミのメンバーで in 太閤山ランド

回 想

国際・英語コース 平成17年卒業
田澤友里子

実家のある岩手県から富山の高岡短期大学に入学してはや二年。あっという間に卒業の時を迎えることとなりました。国立で、しかも評判の良い学校でしたから、親元を離れる不安よりも期待の方が大きかったのを覚えています。

社会人枠で受験した姉と同時に入学し、もともと英語を勉強していた姉は中国語コース、私は英語コースを専攻しました。初めての二人暮らしも、また、様々な土地から集まった同級生達との交友もとても楽しく、得るところの大きいものでした。

そして、私が一番この短大に期待していた勉強面、この点は残念ながら期待通りのものとはなりませんでした。数ある短大の中で偏差値も高く、少人数制を提唱しているこの学校でのハイレベルな英語の講義を受ける事ができるものと思っていましたが、高校の内容とさほど変わらず、パンフレットに提示されていた専門性の高い講義は二年次の後期の最終部分だけであったような気がします。また、年間を通して4ヶ月もの長期休暇や、突

然の休講などで満足な授業を受ける事ができなかったのも残念でなりません。この有料の二年間を使って自分自身で英語学習を進めることができたという点では、大いに有益な時間を過ごせましたが、肝心の短大ではいまいち煮え切ることができず、両親に対しても申し訳ないような気持ちです。

残る短大最後の一学年と二学年の皆さんには私と同様に感じる事が無いよう願わずにはられません。



略歴 平成12年3月 岩泉町立岩泉中学校卒業 15年3月 岩手県立岩泉高等学校卒業 17年3月 高岡短期大学地域ビジネス学科国際英語コース卒業



回 想

国際・中国語コース 平成17年卒業
布目祥子

私は国際・中国語コースに所属して二年間を過ごしました。他のコースに比べると人数は少ないけれど、だからこそ仲良くなれたし、思い出もみんなで作ることができました。うちのコースは中国語に興味のある子、ない子含めて総勢18名。みんななかなか個性が強いのが特徴です。まじめか…？おとなしいか…？まともは…？この質問の答えはうちのコースのみんながよ〜く知っているはずです。そんな私たちですが、実はなかなかバランスがとれたいいコースだったように思います。この二年間を振り返ってみて『楽しかった！』と思えることがその証拠になるのではないのでしょうか。みんなと参加したソフトボール大会や御印祭、おいしく出来たけど大変だった創己祭での恐怖のエンドレス餃子作り、文化の違いに戸惑いがいっぱいだった中国への海外語学研修、そして学校生活、毎日が充実していました。中国語コースは先生方もつわもの揃いで、授業ではおもしろい話をしてくださったことが印象に残っています。この学校にき

て、いつも一緒に笑っていられる友達とめぐり合えたことを本当にうれしく思います。春からの新生活がみんなにとって幸せでありますように。

短大の卒業が目前となったことを寂しく思うのと同時に、もうすぐ一人の社会人として働くことに対し、不安と期待を抱いて生活しています。4月からは、仕事もプライベートも充実した生活を送れるように頑張りたいと思います。

略歴 大門中学校卒業、県立小杉高校卒業、国立大学法人高岡短期大学卒業、日本損害保険査定株式会社入社

